

2011年 6月～8月の日程

山の本講座 6月4日(土) 14時～16時 山の図書館 参加費:500円	山のコース 6月28日(火) 14時～16時 山の図書館 参加費:200円
ミニコンサート オカリナ 6月18日(土) 14時～16時 山の図書館 参加費:1,000円	バスハイク 6月15日(水) 鳴子山(九重) 集合 7時30分 天神・日銀横
山の本講座 7月2日(土) 14時～16時 山の図書館 参加費:500円	ミニコンサート クラシックギター 7月16日(土) 14時～16時 山の図書館 参加費:1,000円
バスハイク 7月16～20日(木、月) 鹿島槍ヶ岳、爺ヶ岳(後立山) 集合 16日15時30分 天神・日銀横	山のコース 7月26日(火) 14時～16時 山の図書館 参加費:200円
山の本講座 8月6日(土) 14時～16時 山の図書館 参加費:500円	山のコース 8月30日(火) 14時～16時 山の図書館 参加費:200円
バスハイク 8月31日(水) 白岩山～扇山(霧立越)縦走 集合 7時30分 天神・日銀横	お知らせ …前号で5月28日、総会に併せ映画上映としていましたが、マンドリンコンサートに変更になりました。

会員募集中(常時) 山の図書館の維持・発展のため趣旨に賛同される会員を募集しています。友人・知人の方にご紹介ください。

新年度更新のお願い	4月から2011年度に入りました。今年度も会費を納入し、更新をお願いします。
山の図書館ニュースの送付	このニュースは季刊で発行しています。また経費節減のためにインターネット「山の図書館」ホームページを利用いただける方「HPを利用するので送付不要」のご連絡ください。

スタッフ・仲間募集 山の図書館の活動に共に取り組む方を求めています。空いた時間を利用して活動できる方も歓迎。

「山の図書館」に、車で来館の皆さまへ
 山の図書館前の駐車場は「山公(蕎麦屋)専用駐車場」です。車で来館される場合は事前にご相談ください。



九州登山情報センター
 〒818-0115
 TEL・fax 092(928)2729

愛称 “山の図書館”

・開館 11時～16時 ・休館 水、木曜

E-mail: yamano_tosyokan@yahoo.co.jp
 ホームページ http://loghouse.mydns.jp/

郵便振替 01780-8-78365
 加入者名 山の図書館

編集後記

☆本紙、前号の発行直後に東日本大震災が発生した。目を疑うような大津波の映像は、自然というには余りにも非情な現象。現実とはとても信じられないものだった。数万の生命が流された。
 ☆あらためて三陸海岸の地図を詳細に見てみると、複雑、急峻の地形が際立つことに気付く。この自然の形状を巧みに利用してきた文明が、現在の生活圏を形成した。人の命はどう位置付けられていたのだろう。
 ☆残された現実には誰もが泣いた。3月末には松本徹夫顧問の急逝と、涙の乾く間もないような事態が続いた。先達が切り開いてきた道を継承する視点は、何よりも登山の中で生命を守る安全性の構築だろう。(S)

山の図書館
ニュース

2011年5月10日
 九州登山情報センター

第37号



ヤマシヤクヤク(九州中央山地)

目次	ページ
松本徹夫氏 その著書	2～3
松本先生と山の図書館	3
栗秋正寿氏 植村直己冒険賞受賞	3
東日本大震災 薪ストーブ・プロジェクト	4～5
その名はホイストマン 命を守る整備士	5
2010年度 山の図書館の活動	6
山の図書館 掲示板 山の図書館日記	7
日程表、事務局	8

九州登山情報センター
 “山の図書館” 総会 案内
 マンドリン・コンサート
 & 懇親会

マンドリン
コンサート



日時: 5月28日(土)
 会場: 太宰府館 まほろばホール
 太宰府市幸府3-2-3
 電話 092-918-8700

・13時～13時30分 総会
 ・13時50分～14時40分
 マンドリン・コンサート
 ・15時～16時30分 懇親会

コンサート&懇親会、どなたも参加できます。大勢ご参加下さい。
 ※会場は西鉄太宰府駅から徒歩2分、公共交通機関をご利用ください。

マンドリン・コンサート

●出演 チルコロ・マンドリニスティコ・テレフォニアーナ

チルコロは「仲間」、マンドリニスティコは「マンドリンを弾く人」、テレフォニアーナは「電話交換手」。51年前、電話交換手の女性を中心にクラブ結成。「心地よい音楽を美しく、楽しく」をモットーに、活動を続けています。

●演奏予定曲

エーデルワイス/R.ロジャース 愛の賛歌/M.モノー
 オーソレミオ/E.カプア サンタルチア/ナポリ民謡
 浜辺の唄/成田為三・中野二郎 花/喜納昌吉 etc

※参加費 コンサート 500円

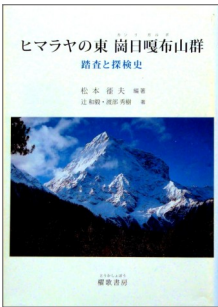
懇親会 2,000円 (飲み物、軽食付き)



まつもと ゆきお
松本 恒夫氏
1929～2011
その著書群を追って
写真 2009年
長崎・黒木にて

略歴 昭和4年 北九州市戸畑区生れ。地質学者、登山家、探検家。九州大学、山口大学教授を経て山口大学名誉教授。昭和20年から登山を始め、しんつくし山岳会、日本ヒマラヤ協会、日本山岳会、日本山岳文化学会などに所属。日本山岳会福岡支部長、日本高山植物保護協会評議員などを歴任。

ヒマラヤの東 崗日嘎布山群
踏査と探検史



厳しかった今冬の寒さも和らぎはじめていた3月30日、松本恒夫氏(九州登山情報センター顧問)が急逝された。日を追って各方面から、惜しむ声が高まっている。いろいろの分野で旺盛な活動をしてこられた松本先生は、また多くの著書(下表)を残された。

初期の著作「山 探検 フィールドワーク」(写真次頁)も、多くの人に読まれた。当初は専門の地質、火山の研究分野を盛り込む構想でスタートしたが、結局は表題のような内容になった。未だ記録の少ない時期、祖母、大崩山地の谷や尾根を歩いて解明していく登山から、未知の領域としてトカラ列島、尖閣列島のフィールド

ドワークへと広がり、そして南極観測越冬隊(1974～76年)までの半生がつづられる。

その中で自然を守る観点からは、1960年代の祖母山・奥岳溪谷の原生林を守る取組みが記録されており、先駆的な活動だった。

中央アジアへの夢は、中国奥地の空白部に広がり、数次の登山、学術隊を組織して後進を育てられた。「ヒマラヤの東 崗日嘎布山群 踏査と探検史」(写真上右)は、2007年・秩父宮記念山岳賞を受賞。記念講演で松本氏は「地理、地名の解明は若き日、祖母、大崩等で培った手法だった」と披露され、付属の地図は、英語版になり世界で流通することになった。

松本 恒夫氏の著書

No.	書名	著者	出版社	発行年	規格	頁数
1	鉱物採集の旅(3) 九州北部編	松本恒夫 著	築地書館	1975	B6	169
2	日本山岳地図集成 第2集 中部山岳(南部)～九州編	松本恒夫 共編著	学習研究社	1975	大型	187
3	山 探検 フィールドワーク	松本恒夫著	玉川大学出版部	1981	B6	228
4	阿蘇火山 世界一のカルデラ	松本恒夫 松本幡郎 編著	東海大学出版会	1981	B6	248
5	遥かなる揚子江源流 青蔵高原 学術登山隊記録	松本恒夫、松原正毅 編著	日本放送出版協会	1987	A5	249
6	火山の一生	松本恒夫 著	青木書店	1987	B6	190
7	日本の自然 4 日本の山	松本恒夫 共編著	平凡社	1988	大型	102
8	九重の自然と歴史	松本恒夫 共著	葦書房	1998	B6	368
9	遙かなり秘境可可西里 崑崙を越えて 日中可可西里学術探検隊記録	松本恒夫 編著	日本放送出版協会	1999	A5	278
10	シルクロード探遊	松本恒夫 著	葦書房	2001	A5	357
11	幻の楼蘭 ロブ・ノールの謎	松本恒夫 著	とうか 権歌書房	2006	A5	459
12	ヒマラヤの東 崗日嘎布山群 踏査と探検史	松本恒夫編著 辻和毅著 渡部秀樹著	権歌書房	2007	A5	818
13	九重山 法華院物語 山と人	松本恒夫、梅木秀徳 編著	弦書房	2010	A5	270

山の図書館 掲示板

新着本 こんな本が届きました

寄贈者 書名 著者 発行年

杉元 勝	ブータン素描
	ネパールヒマラヤ探検記録
	モンブランからヒマラヤへ
	ヒマラヤ名峰事典
	日本山岳研究
右表の他 約30冊	氷山雪嶺二千年
	中国登山ハンドブック
	スポーツ科学講座 スポーツの心理
	フィールド・ノート
	世界の名峰
齊藤一男	東西の接点 鹿島槍に挑んだ人たち
	山岳文学山歩
三日月直之	氷雪の山 スキーアルピニズム入門
	景勝の九州(小杉未醒)
	山に生きる人びと(宮本常一)
右表の他 約20冊	上越の山と溪(中村謙)
	ケルン復刻版(全11)
	ヒマラヤへの挑戦(全3)

※敬称略

山の図書館 日記より

山の図書館の交流
薪ストーブ



これは解体家屋の廃材。山の図書館の薪ストーブの燃料となる。年輪を数えると百年近くになるであろうか、民家の梁の役割を終えてきた。

木は材となっても、育った年数は生きるという。そうなれば200年を過ごしてきた命が、最後に山の図書館を温めてくれる。薪の炎は心がなごむ、とだれもが口にし、ストーブを囲む人の中から、そんな話題に弾んでゆく。

この冬はひときわ冷えた。雪の宝満山から下山してきた人を、この薪たちが迎えたのだ。そんな所どころの焚火とは、ちょっと味わいが違う? その訳はここにある。



崔君の薪割り

某日、ストーブの薪作りをする。家屋の梁や柱など長尺で運んできたものを切断し、割ることになり、これが結構の

手間を食う。薪割りをしていると、宝満山から下山してきた一人の青年が近づいてきた。「薪割り、やってみる?」と聞くとやるという。斧を持つ手、姿勢がどうにもおぼつかなく見えたが、確実に薪の中心から割ってゆく。体幹の強さを感じた。たぶん鍛えられた身体を持っているのだろう。結局、楽しみに残りを全部片付けてくれた。お茶を飲みながら話す。韓国の留学生・崔君で「兵役中も薪割りはあったが、油圧機械だった」ので、いちど斧で割ってみたかったのだそうだ。「あと一年、福岡にいるので、また来ま〜す」と。卒業後はアメリカへ留学!!

栗秋正寿氏が
「植村直己冒険賞」
受賞



栗秋正寿氏(福岡市)写真が、2010年度「植村直己冒険賞」(主催:豊岡市)を受賞された。業績は「中央アラスカ山脈三山の冬季単独登山に挑戦」。

栗秋氏は1998年にマッキンリー(デナリ)(6194m)に冬季第4登(最年少記録)に成功、フォーレイカー(5304m)には、2007年、第3登(単独初登)を果たした。ハンター(4443m)は5回にわたり挑戦しているが、未登。

同氏は1972年、日田市生まれ、九州工業大学山岳時代にマッキンリーに登頂(1995年)。以来、デナリ三山の冬季単独登山を目指し、なおも挑戦を続けている。

著書「アラスカ垂直と水平の旅」(山と溪谷社)

※ 栗秋氏の講演会(JAC東九州支部主催)

7月9日(土)、大分市コンパルホールで開催
(岳人 4月号No.766、朝日新聞より)

日本初のヒマラヤ登山隊
1936年 ナンダ・コト初登頂
堀田弥一氏 102歳で死去

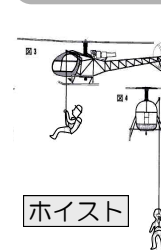
日本人初のヒマラヤ登山となった、ナンダ・コト(6867m インド)は、1936年(昭和11)の立教大学遠征隊で、登山隊員5名の全員登頂という現代にも通じる快挙だった。

その隊長が堀田弥一氏。1954年には第二次マナスル登山隊長を務めた。1909年生まれで今年2月死去された。享年102歳。



因みに、昨年10月に開催した「山の図書館の集い」では、上記遠征隊の記録映画「ナンダコト征服」を上映して、当時の登山情景を記憶にとどめた。(7頁参照)

その名はホイストマン:命を守る整備士
山岳救助へ重責 県警ヘリ、遭難者引き上げ操作



ホイスト

遭難者を結んだワイヤを巻き上げる機械を「ホイスト」という。手元のスイッチでその機械を操り、ワイヤを上下させるのがホイストマンだ。ホバリングの状態に救助隊員を降下させ、さらに遭難者を引き上げる。風にあおられた機体は常に動こうとする。操縦士に指示を出し、空中の一定の位置にとどめさせ、樹木との接触事故に気を配りながら引き上げる。まさに命綱を握る重要な役割を、航空隊の6人の整備士が兼ねている。

現場・収容作業...

現場上空は、深い沢から吹き上げる風がやや強い。市川さん

県警のヘリコプター「やまびこ」が飛行25時間この定期点検を受けていた。航空隊の整備士が黙々と作業を続けていた。点検作業が終わるころ一報が飛び込んだ。操縦士と副操縦士、救助隊2人とともに、もう一人、ホイストマンと呼ばれる隊員が出動準備を始めた。

※はヘリの外へ半身を乗り出して周囲の安全を確認する。「右だ」「もう少し前」「ストップ...OK」。開けた地形の少ない山間部は、救助隊員が降下し、遭難者を引き上げられる場所が限られる。市川さんは、ワイヤの先端の「ホイストリング」を下ろす先を狙い、神経を研ぎ澄ました。※市川さん 整備士ホイストマン

救助隊員を1人ずつ降ろすとヘリは上空を周回して待機する。遺体の収容作業が終わった。無線連絡を受けて現場に戻った。引き上げる時も慎重だ。ワイヤが大きく振ればヘリのホバリングにまで支障が出る。無事に任務を終え、ヘリは1時間程で松本空港に帰還した。

長野県警航空隊... 県警航空隊は1980(昭和55)年8月に発足した。初代のヘリコプター「やまびこ」が配備され、出動が始まったのは翌81年。これまでの30年で1360人以上を救助し、約240体の遺体を収容した。山岳遭難のほか、地震や台風など災害現場にも出動する。同隊の整備士は、常にホイストマンとしてヘリに同乗し、遭難者を引き上げる重役を担ってきた。

※4月30日、5月5日連載から抜粋 構成 (信濃毎日新聞より)

東日本大震災 支援
薪ストーブ・プロジェクト

被災地に薪ストーブを届け、
“暖”を届けた取組み

登山者の生
活力を發揮

情報は“山の図書館HP”で発信された...

3月11日、東北、関東地方を見舞った大地震、大津波は未曾有の大惨事をもたらした。テレビ画面は、まだ冬の寒さの中で苦闘する惨状を刻々と伝えた。木下育美氏は、被災地に薪ストーブを届けようと呼びかけを始めると、大きな反響が寄せられた。

薪ストーブ60台は新潟のメーカーの協力で確保できた。ところが、燃料、車の搬送手段が確保できない。やむなく福岡から新潟経由で搬送する現地派遣チームが結成された。年度

末の厳しい中での一週間の日程だった。

一刻も早くという気持ちと時間の制約から夜に日を経いで走り、二日目に現地に入る。現地NPO・PWJからの情報で、田尻畑(南三陸町)避難所にたどり着き、ストーブを提供する。

ついで簡易シャワーを設置し、地区の人に利用してもらう。翌日は早朝からお湯を沸かし、地区の人たちの朝食準備に提供する。午後からは地区に承諾を得て、瓦礫の中からストーブ用に薪150束を作って提供した。

当初、人々には戸惑いがあった。だが熱心に活動するチームは受け入れられ、共に食事ができるようになった。出発の日、復興の際には再訪するようにと、涙で抱き合って別れた。

薪ストーブは日ごろの登山、アウトドアで

現地派遣チームと
ラインボー号



培った技術と知恵であり、厳しい条件下の生活は冬山で習得した自信だった。そして何より、現地の人と会話し、今何が必要かと見極める人のつながりの重要性を知った。

***** 東日本大震災 支援 *****

壁新聞 2011.3.29 第2号

今すぐ現場に!!
薪ストーブ・プロジェクト

南三陸町(宮城)で活動

3月25日深夜、大牟田、福岡を出発した薪ストーブプロジェクト・チームは、夜通し走り続け、26日夕方、新潟に到着しました。使用する車は「ラインボー号(マイクロバス)」。新潟でストックされていた薪ストーブを受け取り、またこの活動に参加する学生ボランティアの人たちと合流しました。薪ストーブは60台の内、22台は新潟商工会議所手配の10トントラックで、他の救援物資と共に大船渡(岩手)へ送られました。残りの38台と救援物資をラインボー号と1トントラックに積み込んで夜、新潟出発。また夜通し走り、27日午前中、南三陸町(宮城県)に入りました。

薪ストーブは、全て現地に届きました!!

大船渡(岩手) 22台
南三陸町(宮城) 3台
南三陸町(宮城) 4地区 25台

薪ストーブ・プロジェクト 現地メンバー
木下育美、木下聡美、平田真介、杉村新吾
(左から)

3月27日

現場活動中

3月28日 南三陸町内

